にちよう文化

私流 この偉人

京滋の歴史から

12

作家

# 梶井基次郎

## 反価値の爆弾仕掛けた

### 認識ではなく表現 戦後文学史の座標軸

国際日本文化研究センター教授 鈴木貞美さんが語る ▶▶▶

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか

梶井基次郎の代表作「檸檬」(一九二五年発表)の冒頭だ。肺を病む「私」が街角で一個の檸檬をみつけ、生気を取り戻す。京都の丸善に立ち寄り、心を引き付けていた画集を手にとってみると、憂うつになる。そこで「私」は、檸檬を時限爆弾に見立てて画集の書棚に置き立ち去るという話だ。

梶井の研究で著作が多い国際日本文化研究センター教授の鈴木貞美さん(六)は「ほとんど無名のまま三十一歳で亡くなったが、作品の数々はしだいに多くの読者を獲得し、後世の作家に影響を与えた意味では、彼が最大かもしれない」と語る。

「檸檬」は、梶井自身が経験した心の出来事をそのまま書いているように見えるが、幾度も書き換えられ、入念に仕上げられた作品だという。においや冷たさ、形、色など、具体的な感覚を書き込み、象徴的な意味を持たせている。文字を構成し、一つの世界をつくっていく点では、絵画の技法にも通じる。

「二十世紀を通じて、写実主義や自然主義ではなく、具体性と象徴性を兼ね備えた短編小説こそがすばらしいとする考え方があった。多くの作家が目指したことを、二十代の梶井が早くも成し遂げていた。本当にすごい作家だと思う」

「檸檬」が舞台となった大正末期の京都は、流行の最先端を走り、東京の銀座よりもハイカラでモダンな街だった。そんな一番のシンボルが書店の丸善だった。そして、主人公の「私」が壊したかったのは、もちろん丸善ではない。画集に表される倫理や美にとどまらず、すべての価値に対する反逆だった。鈴木さんは研究を通して、作品が持つ意味を明らかにしていった。

「いろんな人たちがつくる世界を壊してみたい。反価値であり、反文化であり、最も過激な爆弾をしかけたのかもしれない」

そんな梶井に鈴木さんが初めて出会ったのは、高校二年の時だ。国語の先生に薦められて読んだところ、強い衝撃を受けた。研究者としての道を歩み始め、三十歳の時に出した最初の本が梶井の評伝だった。それ以降も論文や著作を発表してきた。

「作品自体に魅力がある。それなのに、その正体が何か、なかなか読み解けなかった。まだ理解が足りないとの思いから、彼を通して文学の研究を続けてきた面がある。そして、今の自分がいるのかもしれない」

従来、梶井は愛すべきマイナー作家との見方がされてきたが、鈴木さんは実はビッグな作家だと明らかにしてきた。野間宏、武田泰淳、吉行淳之介、安岡章太郎らに影響を与え、一九五〇年代から七〇年代にかけて、作家の精神的な支柱になってきた。

「戦後の文学史をとらえる上で座標軸になる人物だ。どう世界を認識したかではなく、言葉に表現することが作家の勝負だと強く教えた人でもある。残された作品は二十篇余りで、小さな世界だが、みことに凝縮され、広がりは尽きない」

一九五九年の全集の発刊からブームが続き、その評価は揺るぎないものとなった。

「思想が動き、流行が変わる度に、彼が登場する。多くの人々に愛され、読み継がれてほしい」

(文化報道部　二松啓紀)

東大に進学が決まった梶井基次郎(中央)の三高卒業記念写真。のちに作家になる外村茂(左)と中谷孝雄(右)とともに撮影

丸善京都河原町店の閉店を前に、梶井基次郎の小説「檸檬」を買い求める来店者ら(2005年10月、京都市中京区)

かじい・もとじろう(1901―1932年)　大阪市生まれ。父は海運会社社員。1919年に第三高等学校(後の京都大教養部)に入学し、在学中、肺結核を発病する。24年に東京帝国大文学部英文科に進学し、その翌年、同人雑誌「青空」を創刊し、小説「檸檬」を発表した。冨目漱石や谷崎潤一郎、志賀直哉の影響を受け、詩情豊かな小品を残した。

生前は無名に近かったが、川端康成ら作家仲間は才能を認めていた。死後、彼の評価は時とともに高まった。代表作に「城のある町にて」「桜の樹の下には」などがある。

梶井の魅力について語る鈴木教授(京都市西京区・国際日本文化研究センター)

すずき・さだみ　1947年山口県生まれ。東京大卒。東洋大助教授などを経て96年から現職。専門は日本文芸・文化史。著書に「梶井基次郎の世界」「日本の『文学』概念」「日本の文化ナショナリズム」など。